

日本におけるキリスト教の歩み

その1 伝来から繁栄期-3

室町時代
1336~1573

戦

国

時

代

安土桃山時代
1573~1600

1563年11月に横瀬浦(西海)を消失。翌年、宣教師トルレス、アルメイダは、有馬義貞に招かれ口之津(島原)へ移動。以来、口之津が日本の教会の本部となる。同年夏ポルトガル船が平戸に入港。宣教師フェルナンデスとフロイスは、平戸に教会建設の許可を取得。その後、フェルナンデスに平戸を任せ、フロイスとアルメイダは京都へ行く。五畿内の教会を見学中、アルメイダはビエラ神父から受洗した一人の老医師を連れて、ロレンソと口之津に戻った。その老医師は有能な文学者で後にキリシタン文学の父と呼ばれる。彼はトルレス神父の元で翻訳、養成の仕事に従事した。1565年イルマン・アルメイダとロレンソは、長崎湾の入り口福田から五島に渡り教会を建てた。またアルメイダは天草の志岐に布教。1568年トルレスは、口之津から志岐に移動、その後福田へ&最後大村に移る。この年大村で初めてクリスマス祝う。

1569年平戸で活躍していた優れた伝道士イルマン・フェルナンデスが帰天した。

1570年10月コスメ・デ・トルレス神父は、長崎の新しい港、教会の全てを見ることなく志岐の教会で帰天した。ザビエルの意思を引き継いでから20年間、日本の教会を丁寧に導いた素晴らしい宣教師だった。信者数は僅か五百人から三万人を超えていた。

1579年7月巡察師ヴァリニャーノ神父イエズス会総長より任命され来日

1568年ビエラ神父は長崎に派遣され、翌年11月トードス・オス・サントス教会建造(史跡有)。大村ではトルレス神父が活躍。1570年春トルレス神父病気になり長崎へ移転。そして6月、病のトルレス神父は、新布教長カブラルを志岐迄出迎える。布教長カブラルは、九州全域の宣教師を志岐に召集、会議開催。その際、長崎に新たな港と全宣教師の移動を実施。1571年7月長崎は、歴史的な幕開けとなる新たな町と港が開港した。

カブラル神父は、アルメイダと共に日本の全教会を見回った。五畿内でフロイスとロレンソが活躍、カブラルを織田信長と岐阜で謁見手配、許可取得。1573年織田信長は足利義昭を倒し、政権を握った。1574年カブラルは、京都に戻り再度信長と謁見。九州の教会もアルメイダの活躍で発展する。1570年来日したオルガンチノ神父の設計によりザビエルが夢見た被昇天の聖母の教会・南蛮寺をついに長崎に建設。カブラルは大名大友義鎮(宗麟)に洗礼。その時、日本の教会は信徒数10万人を超えた。一方、カブラル神父は、熱心なあまり、日本人に厳しくした。また日本文化、日本人の心を理解出来なかった。その結果、他の宣教師たちにも日本語の勉強も勧めず、次第に日本人との間に溝が生じ、大きな危機に直面する。

コスメ・デ・トルレス布教長の共同体

カブラル布教長の共同体